



作成日：2014 年 12 月 26 日

# 歴史学への招待

作成者：人文社会科学研究科 M1

**「歴史＝暗記科目」と思っていないですか？**

高校までの歴史は人物や出来事を覚えるだけだったかもしれませんが、大学の歴史は「過去との対話」とよく言われます。過去と対話することで現代世界に起きている難問に少しでも光を照らすことができれば、と歴史家は考えています。

以下に紹介する本は、「歴史学って何ぞや？」という疑問に少しでも答えるような、または歴史学がたどってきた道筋（いわゆる史学史）について書かれた本です。

・E.H.Carr [著], 清水幾太郎 [訳] 『歴史とは何か』岩波新書, 1962 年.

難易度:★★★★☆

→史学の古典。「歴史とは、現在と過去との間の尽きることを知らぬ対話なのであります」(40 頁)という名言に心打たれる。高校までの歴史の学習は客観性を帯びたような「通史」でしたが、大学からの歴史は「主観」同士がぶつかりあうものとなります。このことに対して、著者は重要な主張をしています。

・John.H.Arnold [著], 新広記 [訳] 『歴史—HISTORY (く一冊でわかる) シリーズ』岩波書店, 2003 年.

難易度:★★★★☆

→①歴史を勉強していくことは、地味で根気のいる作業だが興味が湧けば生きがいにもなり得る、②ヘロドトスからアナール学派までを紹介し、実証主義者ランケが見落とした「心性」を著者は重要視している本です。西洋史の方におすすめ。

・小田中直樹『歴史学ってなんだ?』PHP 新書, 2004 年.

難易度:★★★★☆

→「史実は明らかにできるか」と「歴史学は社会の役に立つか」の 2 つのテーマで構成。著者は、明確に答えは出していない。「相対主義」の時代と言われている現在、歴史学に何ができるか、また自分の専攻分野で何ができるか考えたら面白いと思います。



・福井憲彦『歴史学入門（岩波テキストブックスα）』岩波書店,2006 年.

難易度:★★★★☆

→テーマごとに 20 頁くらいで構成されていて読みやすい。この本を読み、歴史のレポートや論文を書くときには、自分の世界に閉じこもるのではなく、広く社会の事柄に興味をもつことが必要だと思いました。社会史でレポートや卒論を書く人におすすめ。

・Norman.J.Willson [著],南塚信吾,木村真 [監訳]『歴史学の未来へ』法政大学出版局,2011 年.

難易度:★★★★★

→E.H.カー『歴史とは何か』刊行以来、歴史学における人文学の影響、「歴史主体」の広がりにも影響を及ぼしたポストコロニアル的観点など、歴史学理論の現在を解説。論文の分析枠組みが見つかるかもしれない？隣に哲学辞書、思想辞書必携。

・歴史学研究会 [編]『歴史学のアクチュアリティ』東京大学出版会,2013 年.

難易度:★★★★☆

→第Ⅰ部：5つの論考、3つのコメント、第Ⅱ部：討議で構成。「アクチュアリティ」＝「現代の課題をいかに捉えるか」という視点がようやく歴史学にも現れ始めた気がする。例えば、新自由主義改革における「貧困」の問題や、大学の国立法人化については、琉球大学にいる上で避けて通れない問題だと思います。他専攻の人も、上記部分は読んでほしいです。